

---

# ballad(for piano)

bluewind

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ballad ( for piano )

### 【著者名】

N4763F

bluewind

### 【あらすじ】

学生結婚をした富松。昔のクラスメイトから届けられた、結婚式の招待状。奏でられるピアノ、永遠の音楽。

## 01・プロローグ

外に出て、夜空を仰いで一息吐く。月も雲も無く、散らばった星だけがかすかに照明している。そして、いつもながら、緊張している。

車に乗り込み、鍵を差し、エンジンを回す。それと同時に掛けっ放しになっていたカーオーディオが動き出す。カセットテープのヒスノイズを背景に、ピアノの旋律と、慟哭とが入り混じる、和音と不協和音との荘厳な調べ。

海へと、アクセルを踏みつける。

浜の駐車場にはもう何台も停まっている。その中の一つの空きスペースに車を入れる。エンジンの停止と共に、車内スピーカーはピタリと沈黙し、静寂となる。すぐに車を降りる。

駐車場を横切って、数歩の石段を降りて、砂地を踏みつける。ザクザクと無味な音を立てて、海の方へと進む。暗闇の浜に、砂の像のよう人の影が幾本も群立している。誰しもが沈黙し、そして海の向こうを見つめている。

その影の隙間を覗けば、海の手前に、大きな影が鎮座している。星空の弱い明かりだけに照らされるそれから、さつきの……幻のように消えてしまった旋律が、続きを奏でるようになにに流れている。黒いピアノの前に座ったその者の、黒い手は、止まることなくもう幾時間もずっと前から動いているよう、よどみ無く、鍵盤の上を静かに踊る。

甘美なメロディ、そしてそれを突き刺し破るような絶叫が、その者の喉の奥から絞り出される。倒錯。あまりに美しいメロディと、あまりに醜い慟哭。紡がれた可憐な和音の線が、崩され、形を無くしていく。不定形な音の空間が、浜辺一杯に広がり、全てを包み込んでいく。それは勿論、そこに居る者の中にも染み渡つていく。

混濁した文字通りノイズが、皮膚の下の空っぽの空洞の中に流れ込む。所々開いている傷口を塞ぐように、蓋をしていく。

体中はノイズに満たされて、それ以上外界の何物も中に入らないようになる。混濁が、心に安らぎを与えた。全て、狂ってしまったい。

カツーン、とこう最高音の打鍵。唐突に澄み切った風が吹きつける。再び、溢れる慈悲のメロディ。端正な和音の進行と、あまりに素直で従順な右手。優しい好きな人の指示する方向へと、何も疑うことなど思わず従う者のように。

両足が震えている。熱い涙がとめどなく滴る。

同じメロディが、五重にも六重にも、幾らでも被さり、輪郭を失っている。滲んだメロディの発せられる先にいる者に、少しでも近づこうと歩み始める。だけビ、無限に遠い。

## 02・両親の死

宮松の大きな家は、街の一等地に構えている。

両親は、彼が大学一年生の時に亡くなつた。両親が仕事の休暇中、高速バスの事故で一人とも死んだ。携帯電話に連絡が入り、示された、二人の安置された部屋へと急いで向かつた。

涙を流し嗚咽を漏らす、会社の関係者やら親類の中で、一人乾いた頬のままだつた宮松は周囲と浮いていた。悲しいとか辛いというよりも、非現実的すぎた両親の死体の様相に、自分でも驚くほど冷静に、彼らの死を見つめた。

入学式を終え、ゼミで教室に集まつた同級生の中で、やたらとべつたり話しかけてくる女がいた。彼女は同期生だつたが、富松より一つ年上のようだつた。彼女は色々な話題を富松に提示した。その中の一つで、彼女は大学に入る前に一年間、イギリスの方に留学をしていたのだと語つた。

どちらかといふと大人しい富松と対照的な、積極的で会話好きの彼女と、深く親しくなつていいくのは早かつた。彼女はお互ひ似ていると言つたが、富松はよく分からなかつた。彼女がイギリスで見てきた、当時の最先端のファッショնの話を始めると、富松も知りうる限りのことを、イギリスやフランスなどのヨーロッパのブランドのことを挙げたりした。一人ともヨーロッパにはそれぞれ詳しいところがあつて、お互ひの喋ることにそつそつと頷き合つたり、盛り上がりがつた。一つの共通点が見つかれば……そして、お互ひ出し合つその糸をひたすら紡ぎあつていけば、いずれ一つの織物が出来上がつていくように、二人の間に何か特別な繋がりが出来上がつていくのを感じ始める。

そして二人は、それから卒業までの四年間、親しみは段々と深いものになつていつた。

彼女はよく富松の家に遊びに行つた。両親のいない、普段は富松一人で暮らしている、鍵を捻れば簡単に密室になるこの場所で、二人は無数に肌を交えた。

そして彼女はいつしか、日の多くをこの家で過ごすようになった。初めは数日のお泊りから始まつたが、大学卒業する頃には同棲といえる生活になつっていた。正式の結婚届こそ出してはいないが、立派な一戸建ての家で生活する一人をはたから見れば、それは本当の夫婦のように見える。

その同棲とも結婚ともつかない生活に、一つの区切りが付いた日。彼女が結婚の届けを持ってきた。

彼女よりも、むしろ彼女の両親がそれを望んでいたようだつた。未婚の二人が、長く同じ家での生活を続けているのを、そのまま傍観しているわけにもいかなくなつたということだつた。

宮松は一応、その届けに、書き込むべきところ、印を押すところなど、仕上げて、そのまま引き出しにしまいこんだ。別に結婚の意志が無いというわけではなかつた。ただ、今すぐしなければならないという、絶対的なタイミングではまだ無いという感じがしていた。まだ二人は、学生で、自身がしつかりとした仕事に就くまでは、正式な形になる気にはなれなかつた。

しかしやがて、半年後、二人は学生結婚した。宮松の就職が決まりたこともあつた。それと共に、それ以上長引かせることが苦しかつたのもあつた。

それからの二人の生活は、流れるように日々が過ぎていつた。あまりに滑らかに、穏やかな日々が続いていつた。

宮松は沢山空いている時間を使ってバイトをした。就職活動も終わつて最後の四年となると、何もすることの無い空っぽな時間が幾らでもできる。学校に出る以外はできるだけバイトを詰めて入れて、暇を潰していた。

そして彼女は、多くの時間を専門学校の時間に費やした。ファッショング関係の専門学校へ入学した。それは付き合い始めた頃から話していたことで、アパレル関連に関心を持っていたことが高じた。本格的にその道を作つていくために、大学四年生という期に、彼女は学校に通い始めた。

夜は大概、宮松が先に帰ってきた。時間潰しにと、料理を作つてみたりする。料理自体は大学一年の頃からそれなりやつてるので、簡単な料理……カレーだつたり鍋物だつたり……だつたらそれなり

作れる。そして、一人、食事を済ませ、残りをラップに包んで、リビングに向かう。それから一時間ほどは、テレビを見たり、本を読んだりして時間を潰し、最後に電気を……キッチンだけ照らしておいて……消し、部屋へと戻る。そしてベッドに飛び込んで、一日を終える。

なかなか眠れなくて、無理に目をつむって布団をかぶつている時、玄関の鍵の開く音が聞こえて、彼女の帰宅を知る。彼女の足音は真っ直ぐ……キッチンに向かっただろうと推測する。そして、その後、風呂場に。その後、トイレに。その後、リビングに。その後、この今自分がいる寝室に、やつてきた彼女を感じる。部屋は、小さな豆電球だけが、部屋をモノトーンに浮かび上がらせている。その電球さえ、紐を引っ張られて、切れ、彼女もベッドに入ったようだった。

両親との死別後、少しづつ時間を掛けて、家の整理を始めた。叔父と相談し、大学卒業まで、父の仕事を受け継いだ叔父の世話になることになった。叔父はもともと別の家で、家庭を持ち、生活していたので、今住んでいる家は宮松一人で生活することになつて、家に残つた遺産の整理をつける必要が出てきた。

叔父との相談の末、父の仕事の引き継ぎは、叔父に全権を渡した。元々、宮松自身、仕事を引き継ぐつもりは全く無かつた。両親の営んでいた家電製品の量販店は、首都圏を中心として、全国に何店舗もある大型店で、業界の中でも非常に大きな実績をあげていた。両親一人で会社の中核を動かしていたことで有名だつたが、実際二人は仕事としてはまったく別の部門で働いていた。販売店での営業活動……実際に客と直接触れる立場の方の指導をしていたのが父で、売上実績や経済面などの利益管理、インターネット事業など、主にオフィスでの仕事をこなしていたのは母だつた。

働く場所も全く違うので、仕事場で一人が面談することはほとんど無かつた（業務の連絡はほとんど電話やメールで行つていた）。その一人が、会社の創立の数十周年の記念に、慰安旅行で、高級高速バスを使って、一週間ほどの長期休暇を取つたのだつた。一人が、公私両方含めて、久しぶりに顔を合わせて時間を持てた矢先の事故だつた。

宮松は小さい頃から、コンピュータに興味を持つていた。自分でパソコンを組み立てたり、コンピュータ言語の本を読んで、簡単なゲームソフトを作つてみたりしていた。次第にその道にのめり込んでいったのは言うまでもなく、高校時代から本格的にプログラムの組み方など、書物を読み漁り勉強していった。

だから、「出来上がつたソフトを売る」両親のような仕事よりも、

「ソフト自体を作る」ことに熱中していたので、自分の進むべき道はその時、はつきりと自分に示された気がした。そのことを、高校一年の頃に、直接父親と向かって、しっかりと自分の意思を伝えたことがある。

父は、細かいことは一切言わなかつた。父は、今の会社は自分一代で築いたと、昔の苦労話を混ぜて、少し自負するような口調でもつて思い出話を始めた。富松は、真剣にその話を聞いた。小さい頃から父とのコミュニケーションは少ないほうだったが、その少ない父との会話の中で、その話は特に熱心に聞いたように思えた。（思えば、この時の話が、生前の父と最期に深く交わした会話だった）

それからの富松の、コンピュータに対する興味は、より深みにはまつていった。

そんな経緯があり、富松は、父の仕事を継ぐことは全く考えてなかつた。だから、叔父に経営を任せることに、何の異論も無かつたし、叔父は元々別の会社で同種の仕事をしていたので（正確に言えば、富松の両親が経営していた“親会社”とは別の、同社と切り離された独立店舗……上を辿つていった根幹部分では同社として繋がつているが、経営自体は独自にオフィスを持つて運営している、同系列の会社だった）、急遽叔父がソフトされたのも、特に会社に大きな混乱が起きることも無かつた。

富松はその後、叔父と相談して、養子という形は避けて、大学を卒業するまでの間、叔父に単純な金銭での手助けをお願いをした。遺族年金の支給と共に、叔父からの援助もあって、生活は両親の死別前とさほど変わらずに続けられた。

父の残した財産の一つ……父の個室（古典的な言い方をすれば「書斎」といったものだらうか）には、大量のレコードと、レコードプレーヤーなどの再生一式機材が揃っていた。父は音楽が好きだった。特に父の学生時代は、ジャズの黎明期と重なっていた。ビ・バップの、当時作られていた10インチ盤レコードが、部屋の壁にずらりとディスプレイされていた。

ずっと幼い頃、父親の部屋の扉は、壁と同等だった。鍵の無い扉でも鍵が掛かっているような気がして、その鋆びた金属の重々しい取っ手に触ることにはためらわれた。一三回に一回、通るたびに、その不思議な密室の壁越しから、小さく小さくメロディが聴こえた。小学生も高学年になると、クラスの話題から、音楽というものに興味を持ち始め、父の密室のことよりも強く意識するようになつていた。

そして小学生の最後の学年の時、春先だつたか夏ごろだつたか、陽気が強くて半袖でも暑かつた日。シャツの張り付いた背中と同じくらい、手の中にも汗の粒を握つて、細かく振動しているその木の扉を、握つた。隙間を小さく開けて覗くような中途半端なことはせず、一ひねりにノブを回し……しかし音はしない様にと、注意を払い払い慎重に開いた。富松は初めて、父の部屋を見た。

全てを千に切り裂いてしまう鋭い嵐のようなアルトサックス。極度に緊張していた富松を脅かすよつた音量で、部屋の中一杯に鳴り響いていた。

溢れ出でくる恐怖の感情、そして、椅子に座つた父が振り返つて見せた顔。富松はとっさに顔を伏せた。怒られる、と思つた。勝手に部屋に入ったからということより、「こんな遅い時間に」と怒声が飛ぶことを恐れた。その時、夜の一十三時過ぎ、いつもは遅くとも

二十一時には寝るように言われていた。

急に部屋は無音になつた。それがあまりに突然のことだ、緊張で息も詰まりそつたので、夢中になつたせいで周りの音が聽こえなくなつたように思えたが、そうではなかつた。また再び音が聽こえてきた。それは、当時の幼い自身が聴いてもハツとするほどの美しいと、相反する恐ろしい不気味な唸り声とが交錯する、全く聴いたことのないような音楽だつた。

それから、どれだけの時間、その部屋にいたか、その音を聴いていたか、よく覚えていない。いつまで経つても終わりの無い、旋律と鳴咽。そして慣れない夜更かしで、極度の眠気がねつとりと身に被つてきた。虚脱感、そして富松は「おやすみなさい」とだけ言って、後ろに返り、部屋を出た。結局、父とは何も話さなかつた、と富松は記憶している。

この時の記憶が強かつたせいか、それ以来、父の部屋には近づくことも恐れた。そしてまた、父はいつも仕事が忙しくなつたのか、家にいる時間が少なくなつた。あの部屋の前を何度も通ることがあつても、扉越しに音が聴こえてくることが無くなつた。そして富松は、音楽自体、聴く機会が無くなつていつた。学校で話題になる日本ポップスにも、興味が湧かなくなつた。また父が好んでいたジヤズも、意識がかえつて障壁となつて、目を向けることは無い。

再び、本当に久しぶりに父の部屋に入った。

左の壁一面に敷き詰められたレコード棚から、その大きなジャケットを何枚か引っ張り出した。MILES DAVIS『NEFE RTITI』、PAUL BLEY『OPEN』、TOLOVE』、最初に手にしたレコードから中身を取り出し、表面に付いた白いごみや埃を息で吹き飛ばした。部屋の奥の壁、棚と棚の間に挟まるようにして、アンプや、レコードのプレーヤーが積まれている。プレーヤーの透明ケースを外し、円盤の配置位置にディスクをのせる。電源スイッチを押し、ターンテーブルの回転スイッチを押すと、ディスクは音静かに滑らかに回り出した。アームを指先でそっと掴み、盤の外周に針を落とす。ブツリ……というノイズの後、かすれたか細いトランペットの音が、部屋いっぱいに充満した。そのレコードを掛けたまま、富松は部屋の様子を一瞥し、その後の整理の道筋について思案した。

まず、この膨大なレコードの整理について。恐ろしいほどの数のレコードがある。部屋の四方を見てみると、壁という壁、レコードのジャケットがぎっしり詰まっている。床から天井近くまである背の高い棚に、一切の隙間も無いほど、全ての箇所にレコードがしまわっている。部屋の中央後ろの方に骨董品のような、彫りの入つている高級机と肘掛け椅子がある。その机の上にも何枚かのレコードと、音楽関連の本、そしてカセットテープが置かれている。富松は机の一番上の引き出しを引っ張つてみた。そこには膨大な数のカセットテープが、これまた隙間無く、几帳面にはめ込まれたようにしまわっていた。次の下の引き出しも、また次の引き出しも。

父がこれほどの音楽を愛好していたことを、富松はこの時はじめて知った。カセットテープの背表紙には、三十年以上前の日付が記されたものがあり、おそらく父が学生の頃に記録したテープなのだろう

うと思つた。

気付いたら、レコードプレーヤーは止まつていた。レコードを聴き慣れない富松には、最初不思議に思つたが、そういえば……と。レコードは片面の記録時間はCDと違つてかなり短いことを、どこかの本か誰かに聞いたことを思い出した。面を反対に返し、再び再生させる。

部屋の整理どころか、鑑賞の時間になつてしまつていて。しばらくはレコードの片面だけを、次から次へと違うアーティストの作品を掛け続けていた。父はジャズのあらゆるレコード全てを持つているのではないかと思えるほど、そのジャンルは多岐にわたつていた。つんざくノイズのようなフリー・ジャズから、ドラマティックなピアノ曲、爽やかな風をほうふつさせるフュージョンに、ヨーロッパのクラシックのようなフリー・インプロヴィゼーション・ミュージック。

父の使つていた革張りの肘掛け椅子に、少し小粋に浅く腰掛けて、頭を後ろの背もたれに垂れ掛けて目をつむり、半ば眠るように音楽を聴き続けた。

そして、ふと思い出したのだ。“あの時”に聴いた、あのピアノの音色を、あの唸り声を。その瞬間、頭の中に大量の血が巡り出したのを感じた、顔が火照つてくる。

体を起こして背もたれから離れ、右手で勢いよく引き出しを開ける、一番上、一番目、二番目……今気付いたことに、その全てのカセットテープに一種の特徴が発見された。全ての背表紙には、淡白で単純な記述が、西暦、月、日につち、そして“コンサート”と書かれている。名無しのテープのようでありながら、表面の書き込みと同様、中身についても共通性を持つていると推測するには容易い。

おもむろに手に取つた、七十八年春頃の日付が書かれたコンサートのテープ。ケースから黒いプラスティックのテープを取り出し、そ

してカセットのプレーヤーを探した。難なく、積み重ねられたオーディオ機器の一番下の段に、黒い古めかしいデザインのプレーヤーがあった。父は黒い色を愛でていた。会社の看板であるロゴも、黒地に、濁つた灰色の文字で会社名が書かれている。

テープはA面最後の方まで進められていた。そのまま反対側のB面を聴こうとも思ったが、富松はテープを一度巻き戻した。百二十分テープは片面戻すだけでも、思ったより時間が掛かった。巻き戻しのスピードが、止まっているようにゆっくり感じられたが、そういう設定にしてあるのかもしれない。カチリと音を立てて止まり、そしてすぐに再生ボタンを押した。

テープ特有のヒスノイズだけが響いている。音量を少し上げる。布を裂き、擦るような高音ノイズ、そして、次第に低音にも重厚なノイズが混じてくる。折り重ねられるように不協和音がうずたかく、建築されていく。

やがて、闇の中に、協和音が色濃く形を現す。黒い波の中に一枚の黒い葉が流れに身を任せ、葉は今一度、生命を取り戻す。再び、濃く色づきはじめた緑は、葉脈をうねらせ、切り口から新たな花を咲かせる。花びらの隙間から甘やかなメロディが溢れ出す。芳醇な薰りは、黒い闇の中では鼻腔を強くすぐり、腰が碎けるほどの心地良さになすすべなく、甘美な時間の経過に全てをゆだねていく。そして、突き抜けていくような絶叫、またも唐突の変化。悦楽に穴を開ける。瑞々しく回復しかけた葉を、焼き尽くす熱い光線のよつな、一直線の絶叫。とろけ切った脳髄の底に穴を開けたような衝撃。目の奥が真っ白になつたような感覚と共に、気が遠くなつていく。高い高いところから飛び降りた時のような、いつまで経つても地面がやつてこない、空中を飛んでいるような感覚。浮遊感……というよりは、墜落していくというべき、抵抗できない重力という強大な力に操られている、終わりの無い落下。真っ黒い何もない空間の中で、断続的に強力なフラッシュが焚かれ、一瞬目の前に自分の影が

浮かび上がつては、幻のように消えていく。現れ、消えていく。現われ、消えていく。記憶が危うくなつていい。何とかその影の形を、正確な姿を網膜に焼き付けようと、目を見開いてよく見ようとする。だけど、明るみはもう一切無くなつてしまつた。光は消え失せてしまつた。

光と影、くるりと、まつ逆さまに転回した。  
心臓の壊れたような危うい拳動、焼ける胸の痛みと、ジッと汗の滲んだ肌と、そして無音。蛍光灯の明かりはしつかりと、部屋の仔細を見せている。すでにカセットテープは沈黙していた。

宮松は、天井を仰いだ。両目から涙が、頬のふくらみに沿つて垂れ落ちた。その涙は彼にとって十数年来の、胸の奥から湧き出てきた涙だつた。涙は止まらない、それはもうずっと数分前から……闇の中にさまよっていたときから……ずっとあふれ出ていた。宮松自身の意思ではどうにも止まらない、思い起こすほどにいつそつ勢いを増して服を濡らしていく。両腕の袖で拭つ、止まらない、止まらない。

宮松は、そんな自分の姿を冷静に見よつとして、しかしかえつて混乱は深まつていくばかりだつた。

父の密室、家の奥の方に位置するこの音楽室で、宮松は一人、涙を拭い続けた。いつしか、次第に体の力が抜けていき、背骨は朽ち始めた樹木のように折れるように曲がつていき、机に両腕を下敷きにして突つ伏して、いまだ止まらない涙のせいでグシャグシャな、湿り切つた嗚咽を漏らし続けた。

その夜から、部屋には朝も昼も夜も、音楽の止む時は無く響き続けた。肉体と精神を分離させ眩い太陽の元へと上昇させていく風のような美しいピアノの調べと、血を吐くような痛みと悲しみを内包した絶望を轟かせる絶叫と。音量は、耐えられる限界まで引き上げられ、窓やドアにはしつかりと鍵を掛けた。父の部屋には小型の冷蔵庫が置かれていて、その中に買ってきたミネラルウォーターのペットボトルを、入るだけ中に詰め込んでおいた。そして、四日間。宮松の一生の中で、この四日間だけは、自分と、そしてこの音楽だけが、世界の全ての存在となつた。音楽を聴いて、飢えては水を求めて、そしてまた音楽を聴いて。

宮松は特に音楽好きでもない。中学生くらいの時、ある海外のロックアーティストの音楽が映画に使われて、日本でそのバンドが大ヒットした。それまで音楽に興味無かつた友達が、そのバンドのCDを学校に持ってきて自慢していたのを見て、なんとなく宮松も惹かれてレンタルしてみた。唯一音楽について濃い記憶を持っているのはそれぐらいだった。後はテレビで流れるような口当たりの良いポップスくらいしか知らない。

ピアニストの狂った絶叫に、宮松の目に穴が開いてしまったように、黒い眼の奥からは涙が溢れ出た。宮松はやがて拭うことを止めた。厭うことは無い、気にすることは無い。数日間、風呂にも入らなかつたので、体中汗がべつとりと滲み、埃もこびりついていた。でも不愉快だと思うことは、不思議と無かつた。宮松は、闇の中にいたから。そこに自分の姿は無い。自分の体は“無い”。天の落雷のような、真っ白い鋭い光が時折射すことがあるけれど、それは黒い影しか見せない。唯一、孤独感だけは、常に宮松の意識の中に張り付

いていた。その影は、自分一人分しかない。

四日目の朝、まだ明けず空に深い暗い蒼みが残つてゐる頃、ふとその闇の中に、人の存在……人の声を認めた。それは母国を捨てて飛び出し、迷い込んだ未知の土地で、自分と同様の、もう一人の人間を発見した時の感情……と例えられるかもしれない。宮松は息を呑み、反射的に再生機を停止させた。そしてその発見が、幻なのか本物なのかを確かめるために、宮松は恐る恐る、テープをほんの少しだけ巻き戻し、そして再生させた。その声は、幻ではなかつた。

その言葉を、机の上の鉛筆を取つて、机に直に書き記していく。宮松はその“詩”<sup>うた</sup>に、覚えがあつた。学校で学んだのか、本で学んだのか、詳細ははつきりとしないが、確かに記憶だけはある、印象的な一文。テープは野外でのコンサートらしく、マイクに風が吹きつけられて、音全体が濁つてゐる。それに混じつて、はつきりしない低い呴き声で、祈りの声は、同じ文句を数度繰り返してゐた。

『潮風が吹きつけ、手に沁みた。私は今、生きているのだと、信ずることができた。私は無性に嬉しくなり、涙が溢れ出た。海岸まであと数十歩、私は決して振り返りはせず、走り続けた』

三度目の繰り返しの時、一際激しい叫びと、叩きつけるようなピアノのタツチに、その詩は途切れ、そしてピアノは、たつた一つのコードを繰り返し奏で続けた。寸前の沸騰した怒りが吹き飛んでしまつたような、優しく撫でるようなタツチで。執拗に、執拗に、執拗に、執拗に。

今いる場所から、先へと進んでいける、唯一の道しるべだと信じた。

詩の一編を、自分の部屋からメモ用紙を持ってきて写した。そしてまた部屋に行き、パソコンの電源を付けた。起動の間もまだるっこしくて、机の脇に置かれた、小さい頃から使っている本棚の、一番下の段を見るためにしゃがみこんだ。そこは奥行きが広くて、表側の本を取り出すと、奥にもさらに本が入っている。その中の『国語便覧』と背表紙に書かれた、手のひら大の大きさの赤い本を抜き出した。高校生の時に教科書と共に買った、国語についての様々な知識や情報が載つた本だつた。表紙をめぐり、目次から『詩人』の項目を見つけ出し、ページを繰つて聞く。文字を読むというより、その形を見るような調子で、大雑把にページを見ていった。時々パソコン画面に目をやつてみると、ちょうど起動が完了したようだつた。便覧はひとまず、机に開いたままひっくり返して置き、椅子に座りながらマウスを操作して、インターネットに接続した。

インターネットには様々なサイトがあるが、その中には百科辞典が巨大になつたようなサイトがあつた。定額制の有料の会員サイトだが、情報量は凄まじく、日本のみならず世界中の名だたる百科辞典の情報が、そのサイトには丸々収められている。例えばアメリカ人の辞書ならば、日本の辞書には載つていよいよ、アメリカ人のマイナーな作家や詩人の情報が、母国の辞書ならではの詳細さと豊富な情報で載せられている。このサイトの利点は、検索の機能を使えば、日本の辞書、アメリカの辞書、イギリスの辞書、フランスの辞書……等等、世界中の様々な辞書の中から、目的の情報を書き集めることができることだつた。

宮松は、先の詩の一編を、検索枠に書き写し、検索開始のボタンを押した。情報が多い分、結果の表示まで数分待たされた。そして日本語の辞書から四件ほど、該当されると思われるページのリンクが示

された。そのうちの一一番上に現れた、『折原康平』という人の名の書かれたリンクをクリックした。予想以上に多くの、生誕から死後のことまで、大体かいづまんで程度のものであるが、作家のことを知ることができた。

生誕地は複数説あるらしく、岩手、または広島だという、この二つの説が一番有力らしい。海を描いた詩が多いことが、海岸に近いところでの生まれを想像させる一因だという。そういうえば例のテープも……と思い起こす。

彼はハーフだったという、日本人の父とアメリカ人の母との間に生まれた一人息子で、生まれも育ちもずっと日本で過ごしたらしい。作品はほとんど公式には残されておらず、彼が生きていた頃に、本人の意思で発表された作品の記録としては、当時のマイナーな同人雑誌に載せられた数作のみだという。それまでの彼は、単に「売れない幻の同人作家の一人」だった。彼の存在が世に少しづつ広まつたきっかけには、彼の死後、ある人物の尽力により発刊された全集にあつた。

彼の死後、残された遺産の処分について、彼と生前親しかつた数名の者の間で論議された。彼には家族や親戚はいなかつた、両親はすでに死んでいたし、生涯独身であつたという。数人のわずかな友人、知人が、彼の死のことを聞き、彼の住んでいたアパートに集結した。そのうちの一人が管理人として遺産を受け継ぐ形で結論が出た。遺産……当然、作家の残した、創りあげた文章のことを意味する。住んでいた家がアパートならば、それ以外に彼は何も持つているものは無かつた。

持ち主はすぐさま、その遺産の作品を出版し、公表することを進めていった。都市伝説的な噂によると、その管理人は特に厚く作家の信頼を受けていた者で、『生前の遺言を唯一聞いた者』だという。

半ばその者の独断で本は出版されたという。数作の小説と、数十編の詩、唯一の記録として一冊にまとめられ、自費出版によつて発売されたという。

ページの下の方には、その本に収録されている作品のタイトルの一覧が記されていた。富松は一つずつ、リンク付けられているタイトルをクリックしていく。リンク先には、彼の作品がそのまま丸ごと書かれていた。富松はプリンターのスイッチを押して電源を入れると、それらのページを一つ残らずコピーしていく。本はおそらく百ページも無いような代物じゃないだろうか。全てをコピーするのにさほど時間も掛からなかつた。さらに縮小して、手に持ちやすい文庫本程度の大きさにしたら、それぞれを真ん中で折つて、端と端をくつ付けてホチキスで留めた、それっぽく簡易の文庫本のよう仕上げた。

コピーした作品の中の一つに、例の声と全くフレーズが存在した。詩の一編であつたが、面白いことに、別の作品の、ある小説の中にも類似した文句が書かれていた。接辞や言い回しは若干細かく違つていたが、よほどその韻を好んでいたのか、物語の中で登場人物の“その”言葉は、さらに熱情みを帯び、より言葉に深みが増していくように富松には感じられた。

作家の諸作の中でも、この詩は特に有名ということか、別にリンクが作られていた。クリックすると、独立の情報ページが現れた。それによると、詩を歌つたと思われる有名な浜辺があるということだつた。それは作者の生誕の地と結び付けられて考えられていて、広島県の　浜という名が書かれていた。

次取るべき自身の行動を決めた。パソコンは付けたまま、机の上に置いてある財布と携帯電話を両ポケットにそれぞれ突つ込むと、扉

を開け、外へ飛び出た。

入り組む路地は無限の道筋を作り出していく、その中の一本の道を選び出して進んでいく。富松にはそれから先、ずっと真っ直ぐの道を歩いていたように記憶している。迷うことなく彼が向かった先は、一番近所にある、大通りから住宅街の中に曲がってすぐの道筋にある、中古の本を扱う店だった。

自動ドアが開くのさえもどかしい、開ききらないうちの隙間を滑り込むように、体を斜めにして中に入ると、冷房の冷気に少し震えた。己の興奮を意識させられる。だけど、止まらないところまで、もうきてしまっているのだ。

まだ目的の書棚に足がたどり着く前に、田だけはその場所だけを見つめていた。まるで透視しているように、他のものは透き通つていて全く目に映りはない。繋がった糸を手繰り寄せるように、体は導かれ、体は自然に引っ張られていく。地図の戸棚へとたどり着き、中国地方の詳細な日本地図を、指当て探し当てる。数冊の本を抜き出して、それぞれの巻末の方を開いて、比較していく。やがて一つの本に、かの浜の名の記載を見つけ出した。

財布に突っ込んだ有るだけのお札と小銭と、一着分の着替えと、折り畳みの傘に、胃薬や傷薬などの常備薬、あとは、何が要る？思いつくだけの持ち物を一式、リュックサックに詰め込んで、チャックを閉める。

日に日に気温は高くなり、夏の青さは濃さを増してきている。けれど富松は布地の薄い長袖を選んで着た。昔小さい頃に読んだ冒險小説で、ジャングルを歩くために長袖を着る、ヒルや虫などに食われたりしないようにという予防法である。それと比べたら……今していることなど大げさだが、ただこれから旅をするということに、心の幼い部分が疼いたのだつた。

最後にあらためて、鞄を開けて中を見て、持ち物の最終確認をした。もちろん、引き出しの中のカセットも、一本ほど抜き取つて入れた。向こうで聽けるように、カセットの携帯用のカセットプレーヤーも。どのテープを持っていくか大分迷い、たつた数回ほど聴いただけだが、特に気に入つた七十六年七月二十五日の演奏と、七十九年十月二十七日のものを選択した。

そして、白いハンドタオルを一枚、タンスから抜き出して鞄に入れ、閉じる。左肩の紐をがつしり掴むと、やや力任せに勢い良く引つ張り上げる。膨らんだ袋は身体の周りで螺旋を描いて、やがて背中へぴつたりくつ付く。残りの右肩の紐をかけると、背筋を軽く反らした。

充電器にセットしてあつた携帯電話を取ると、電源を消した。そして財布を取ると、三角折りのそれを伸ばす。札入れと小銭入れには、合わせて数万円ほど。カード入れの部分の、銀行のキャッシュカード、クレジットカード。そして思い出して、いつも通学や遊ぶ時に使っている、迷彩柄の少し大き目のポシェットを床から拾い上げる。その中にいつも入れている、銀行の通帳を取り出して開いた。アル

バイクで作ったお金はほとんど使っていなくて、数ヶ月は何もせずに楽に生活できるほどのお金が貯まっていた。通帳もそのまま携えて、一度部屋の中を一瞥した。

父親の死後、主無き陰臭いこの部屋には、膨大なレコードやCD、そしてテープが、棚やケースの中に詰まって埋まっていた。死蔵の穴倉のようなこの場所にある物たちは、文字通り死の臭いを放っているようだった。

ただ、今この時、古ぼけたテープたちに、生の芳香を復活させよう。こいつらはまだ完全に死に絶てではない。永遠の命は無くとも、永遠はあるのだ。今一度、時の流れの中に。

宮松の鼓膜は揺れずとも、あのピアノと声は聴こえる。音の波紋が身体に伝わり、いつまでも震え続け、痺れさせる。それが神経を動かし、血に熱と力を与え、そして今、地を蹴つて、旅立つていくのだ。

昼下がりの地方の市営バス、大道路沿いに出て数分辺り歩いた停留所には、一人分の影があった。ひざの上に手の平と同じ大きさの小さなポシェットを置いて、ベンチに座っているおばあさんと、灰色の手提げ鞄を持って、道の往来を目を細めて眺めている男……ちょうどおばあさんとは……ベンチの端と端辺り、停留所の安っぽい雨避けの屋根の下で……最長の距離を開けて男は立っていた。その年格好や雰囲気からして、自分とほぼ同じ年で、同じ大学生なのだろう。

宮松は一人のど真ん中、誰もいないベンチの空白部分に腰を落とした。十分ほど待った後、学生が何か気配を察したらしく道路の上流を見やると、大型トラックにはさまれるようにして、バスはちょうど、こちらに近づきつつあった。本流からずれてバスストップの地帯に流れ込み停車。田の前にして、ようやく動き出したおばあさんの動きに合わせるようにして、宮松はあえてゆっくりとベンチから立ち上がる（隣の男もすぐにバスに歩み寄ろうとはせずおばあさんの様子を窺っている）。

旅の始まりの記憶というものは、いつまでも濃くはっきりと、鮮烈に残っている。そして一時間弱もの退屈なバスでの何もない時間を、宮松はテープを再生することに全て費やした。目をつむり、感覚ができるだけ少なくして、少しでも耳の集中力に回したかった。どうせ降車場所は終点だ。

海までの道は、どれだけあるのだろうか。不規則に強く弱く揺られながら、潮のかおりにはまだ遠い。

改めて考えることでもないが、初夏だった。この季節になれば皆、友達や、恋人や、夫婦らは、雑誌やテレビ、インターネットなどで得た情報を持ち寄って、一箇所に集まり、あっちの海はどうだ、こ

つちのホテルはどうだと、まるで学者のように手元の資料を使って論評しあつている光景が、どこでも見られるものではないか。

繰り返しの日常からの逸脱。富松の高鳴りは、単に心臓の熱く深い動悸から、その振動は心臓から繋がっている肉体全て、骨や神経などを介して、全身へと伝導していくのが分かる。それは、だだつ広い大海原の潮の満ち引きの中に、全身の力を抜いて呆然と浮かび上がっている時のこと……引いては押して押しては引いて……自然に全てを（身体も意識も）委ねて、たゆたっている時の身体への刺激と類似している。その微弱な痺れによって、日常という感覚との繋がりから開放され、自然の律動と自分の感覚とが融合していくまさにその瞬間瞬間である。この幻のようなひと時を途切れさせないために、なおさら奥の世界へと深く入り込もうと努力を試みる。

自然が、身体に正しいリズムを教えてくれて、それを素直に受け取つて任せるまでだ。と、富松はこれまで生きてきた中で、もつとも素直に思うがままに、自分の考えを信じ、そして進むだけだった。ピアノの流れるような旋律は、波の音と親和に溶け合つて、あまりに可憐に、優美に、そして物悲しく響いている。そして富松の嗚咽は、ピアニストの悲痛の叫びの内側に滑り込み、張り付き、隠れ、優しく包み込まれている安心感にため息が漏れる。今、自分という存在は、このピアノの音色と、叫びと、波音と、三つの元素で全て構成されている。

寂しい揺れの收まりに、富松は目を開いて、左手の窓を見る。終点の駅前の停留所に停止している、そして自分を除いた最後の乗客が、ボックスにお金を入れ終えて階段を下りていく後姿が見えて、富松も勢いよく立ち上がる。

バスは富松が降りるとすぐにアクセルを踏んで出て行った。駅の方へと、駅前の商店街の道路を歩いていく。ステレオタイプのその道は、二車線の大きめの道路に沿って、デパート、本屋、カフェ、CD屋、ホテル、そしてオフィスビルなどが連なる。その内の、個人がやつていると思われる本屋に入る。真っ先に向かったのは旅行のガイドブックなどが置いてあるコーナーで、目的の本を探し始める。とはいってもこれから行くところの浜のことは、先のインターネットで大量に調べ、プリントアウトし冊子にして持つてきている。欲しかったのは時刻表だった。

ある程度の道筋の計画は立てている。とりあえず目的の県までは、新幹線を利用して一気にむかう。しかし駅から目的の浜には、向こうの鉄道や、バスを利用しなければならなかつた。時刻表もネットで調べることはできだが、富松はあえて本屋で買うことにした。この本さえあれば、旅先でとても大切な足となる乗り物の情報を、詳細に、大量に知ることができる。

「もし仮に、これから向かう浜で、また新たな別の情報を得たなら……」と思う。そこからその手がかりを頼りに、再び別の場所へ発つことになつたら、この本があればすぐに乗り物の情報を知ることができ。それは例えるなら暗闇での懐中電灯のようなもので、道を明るく照らし出してやらねば危なくて歩けないし、道さえ見えればその先がどんなに怖い未知の世界であったとしても、踏み出していく勇気が持てる。

時刻表は大小様々あつたが、素直に持ち運びやすい一番小さいもの

を選んだ。

本屋を出ると、また道を歩き始めて、駅の改札口へと出る。新幹線に乗るために、地方の一都市であるこの街の駅では駄目で、新幹線の通つている大きい駅まで向かう必要がある。切符を買い、自動改札をくぐる。

スーツを綺麗に着こなして静かに立つてゐるサラリーマン、あとは学校帰りと思われる夏服の学生服を着た四人組の男女や、数人の小学生くらいの小さな子供たち一人が、それぞれ思い思いの話のネタに、時にはしゃいで騒いだり笑つたり、日常のプラットホーム。その中で一段浮いてゐる自分の存在を、ホームの一番奥まで黙つて歩いていつて落ち着けた。もうすぐ長期休暇の夏休みが近いけど、大体の小学校や高校なら、まだ一学期は終わつてはいない。とはいっても、だからと別に、宮松はそのことを変に気になどしていない。むしろ唯一で、最後の完全なる自由な時間が、今だから取れるのだという喜びのほうが大きく、改めて良い時期に今回の旅の日程が取れたことを幸運に思った。

そして、そこからの電車旅の記憶も、ほとんどが耳元に流れる、波と、ピアノと、声とに集約される。長い真つ直ぐな線路を、どこまでもどこまでも……しかし夢は終点で途切れてしまう。目指す海まで、一路。電車に乗つて、終点、終点と繋ぎ乗つていく。一見、真っ直ぐに目的地へと下つてこようでも、細切れの道を繋いで繋いで渡つていくようだ。車窓は色とりどりに、街や村や、森や林や、自然や人々の世界を、様々な景色を映していく。時折列車は海岸線に近寄り、初夏の太陽の照り返る眩しい海原を見せてくれた。この海は、自身が“見た”海とは違うけれど、そういうこととは関係なく、遠くの方へ来たという思いが強くなつていく……生まれたところには海はない。頭の中に現れている海はもつと寂しげで寒々しい。目の前には、夏らしいピカピカと光る、自然界のたくましさを感じ

させる力強い海だった。

そんな絵も、日が落ちるにつれて暗さを次第に増していく、オレンジ色の燃えるような夕日が最後のともし火のように、やがて吹き消え、窓の外はほとんど暗闇に塗りつぶされる。いまや列車の中の明かりが眩しいほどで、急に興がそがれた富松は、ポータブルプレーヤーを止め、イヤホンを鞄の中にしまいこみ、ここで初めて列車内の全体をぐるりと見回した。乗客は自分を含め、数人しかいない。

鈍行で、しかも全く名を聞かない地方の線路を走っている。大量の時間の経過を、富松はあまり実感していない。ただめぐるめく外の景色をとりとめもなく眺め、耳はイヤホンから聴こえるピアノの音しか無い。扉を開けたら見知らぬ土地にたどり着いていた……そんな感じに近い。ここにいる人たちは（自分を除いて）地元の人たちしかいないだらう。どことなく垢抜けない人々の容貌は、自分の住む街の田舎臭さとはまた違う、独特の野暮ったさを感じさせる。自分だけ、まるでそこには場違いの人間のようにも思えて、急に薄ら寂しさを覚える。けど、その何ともいえない孤独感には、全く別のが感情も入り混じっていた。

それはいうなれば“勇気”というべきものか。  
この旅を必ず実りあるものにするといつ気持ち。  
知らなかつた世界を知るということ。  
未知の世界に進んでいくこと。

自分と外界との対比。

今、自分の魂は孤独に浮いている。そうだ、今は自身の魂を強く意識している、だから孤独感が募つていくのだ。これが、一人で旅をする、ということなのかもしれない。

自分の肉体さえ客観的に“別の存在”と感じる。その肉体の中に隠れるように包まれている、弱弱しい“魂”が、この道を行こうとする、電車に飛び乗り、海へと行こうと願っているのだ。全ては、己の魂の赴くままに。

電車は、目的地、  
××駅へと到着する。

電車を降りる時、宮松の乗っていた車両には他に一人しかいなかつた。その男は腕組みをした真ん中に頭を突っ込んで、死んだように眠っていた。宮松は一人、静かに腰を上げ、軽やかなステップで扉を出る。

薄闇、月の姿は見えない、ホームの蛍光灯の白い無機質な光、……その時のゾッとする冷たい感じは、はっきりと身体に沁み込んで（血肉に）記憶された。文字としては夏の初めと書くけれど、まだ時々シトシトと雨の降る日もあるこの季節だから、……無い月は、垂れ込めた雲の向こうに隠れているせいなのかもしない。……雨雲の冷たい風が吹いているのがもしそれ。ただそういう理屈を、いちいち考えるよりも先に、冷たさは素早く、鋭く全身の無数の毛穴に差し込まれる。身体の内から感じる冷たさだつた。

が、その感覚は一瞬で消えている。ふと気付けばもう元の、夏の夜の少し氣だるさを持つた空氣に戻つていて。数秒にも満たないその瞬間は、さながらビデオの一時停止によつて止められた時を見ているのと同じように、一瞬が数分にも引き伸ばされたのではないかとも思えるような長い瞬間であつた。やえに宮松の意識の中に深く残されたのだった。鳥肌が立つていて。

改札をぐぐり（誰もいない）、待合室をぐぐる。ただアスファルト・コンクリートを固めて造つた広場としかいえないような、バスのロータリーが目の前にある。一応時刻表を確認してみるが、当然運転は終わつていて。今日はこのまま、近くで泊まることに決めた。

しかし、幾つか考えていた案は、十数分後には全て諦める結果となる。どこかに漫画喫茶でもあれば……二十四営業のファーストフードかレストランがあれば……カプセルホテルに泊まれば最高だ……しかし、それら全て無かつた。駅前のみならず、少し歩いて路地

を入つたが、民家や小さな商店らしき建物ばかりである。

唯一、駅正面のバスロータリーから真つ直ぐに行つた先、突き当た  
り左右に伸びている丁字路のところに、眩しいくらいに光るコンビ  
ニがある。座つたり寝たりゆっくりは出来ないが、とりあえずその  
中に入つていつた。いきなり眩しい明るいところへと来たのが、脳  
にどういう刺激となつたのか、急に緩い粘着質の眠気が頭の中に流  
れ込んできた。ぼやけた意識で本棚のコーナーに寄る。特に意味も  
無く、道路地図か町の地図はないかと探すが、ほとんどは漫画ばかり  
である。

そのまま奥へと向かい、壁一面の冷蔵庫からオレンジジュースのペ  
ットボトルを取る。次いで、パンの棚に、アンパンと、ピーナッツ  
バターが間に挟まれたコッペパンを取る。そのままレジに、会計を  
済ます。外に出る。そしてまた駅の前に戻る。

駅舎の壁に寄り添つて、背もたれの低い木のベンチが設置されてい  
る。座り、先ほど買ったコッペパンを手に取り、袋を破る。力が入  
り過ぎたか、袋は縦に大きく裂けて、こぼれ落ちそうになつたパン  
を慌てておさえる。口を大きく開けて、かぶりつく、数口で全てを  
食べてしまう。ジュースを半分飲み、あとは全てリュックの中にし  
まつてしまつ。

ベンチの端にリュックを置き、叩いて出来るだけなだらかに整える。  
体を横に倒していきベンチ全体に預け、頭をリュックの上に置く。  
少し居心地が悪かったので、リュックと頭の間に両手のひらを挟んで、  
眠る体勢を作つた。

本気で眠るつもりは無い。ただ横になつて、身体を休め、朝日が昇  
るまで待つのだった。唯一気がかりは、雨が降らないかということ  
だった。ベンチの上には特に雨避けになるような屋根はついていな  
い。けど、そうなつたら駅舎に入ればいいだけだ。深く考えず、目  
をつむる。

じつとしていると、また風の冷たさを感じた。やはり、まだ梅雨が

明け切つていないと、いうことかもしれない。けど、瀬戸内の気候は、  
温暖で、雨が少ないと、いうことは知っている。

再び目を開けた時も、まだ夜は終わっていなかつた。辺りは黒く、深く染まつてゐる。けど、夜明けまでそれほど遠くないだろつ。頭を起こす。

手足の筋肉が少しだるい。氣だるさを振り落とそうとするよつて、腕を回してみた。さほど効果はない。昨夜の寝る前の時よりも、今の方が眠気が強い。だらしなく股を開いた右足の上に、力の入らない片腕を引っ掛けた。ジッと、無言で座り込んでいる。

やがて、いつとははつきり氣付かぬうちに、闇が濃い藍色へと色を持ち始めてきた。天のまだら模様、あいにく曇りのようだ。幸いといつべきか、雨は降つていない。腕時計を見やる。バスの始発までまだ数時間ある。

重みで凸凹に潰れたリュックを、上に引っ張つて伸ばす。中からアンパンとジュースを取ると、案の定パンは生地が破れて、中身のアンパンがちこちからみ出でてゐる。慎重に袋を破いて、零れ落ちそうなアンをすり取りながら、あつという間に全て食べ終える。まだ胃袋には、もう少し入りそうなので、立ち上がり、リュックを右肩だけ引っ掛けた、また昨日のコンビニへと入つていった。

食べ物を買う前に、先に、雑誌コーナーで色々読んで時間潰しをした。特によく読んでいる漫画があるわけではない。これまで単行本でしか読んだことの無い、週刊誌、月刊誌を一つずつ目を通していく。ほとんどが連載作品となつていて、意味は分からないうことが多いが、勝手に物語の前後を補足して一気に読み進めていく。風に舞うページのようにめくつていく。

置いてあるもの全て読み切つてしまつと（けど内容はほとんど覚えていない）、またジュースのコーナーに行き、パンの棚に行き、同じような菓子パンを選んで、レジを済ませる。

再び駅舎前へ。コンビニの袋をベンチの右手に、リュックを左手に置いて、先にリュックの中を漁る。ポータブルプレーヤー、イヤホンを耳の中に入れ、そして再生させる。プレーヤーは、シャツの胸ポケットに入れてしまう。今日は……今日もずっと、聞き続けていよう。

本物の、海の香りがするまでは、もう遠くはないはずだ。

空気はひんやりと、湿っている。けど別に、雨が降つても構わない。

窓ガラスについた雨の水滴が景色をモザイクにする。時折水溜りを  
タイヤが踏み、飛沫の音を立てて進んでいく。光の量も幾分少なく、  
やや憂鬱な、くすんだ空色。イヤホンを、左耳だけはめて、右耳は  
開け放している。バスの中は、たまに強く吹かされるエンジンの音  
を除けば、落ち着けるほどに静かだった。信号待ちに、アイドリン  
をさえやめてエンジンを切ると、道路の真ん中にたたずんでいるか  
のような気持ちになる。雨の音が綺麗だった。

そして、降りるべき停留所の名を聞き、停車意志を示すボタンを押  
す。しばらく走り続けた後、車体は横に揺れ、そしてつんのめりそ  
うになりながら少し乱暴に停車する。しつかり止まるのを待つて、  
その間にリュックの中の折り畳みの傘を取り出し、留め金を外した。  
立ち上がる。ボックスタイトに立つて、傘を外  
に向けて勢いよく開き、外に下りた。その際、わずかに肩が雨水に  
濡れた。

空の蒼さが地にも染み渡ったかのようにな……濃い藍色から薄い水色  
まで、空と地表は様々なトーンに成りながら、まるで水の中の世界  
のようだつた。もう夏に入りかけていることを忘れそうになるほど  
の、冷たい色合いを見せてている。ただし、吹き渡る風だけはその季  
節らしい、生ぬるい。モノトーンの淡白な浜の姿は、夜明けか夕べ  
の時を示しているといつても間違いないような、そんな寂しげな景  
色だった。

バス停を下りたすぐ目の前には、大きな海の姿を見せてくれている。  
浜辺と海の境目の線はゆつたりと湾曲し、浜の先は雨のせいで煙つ  
て滲んでいる。海も、空も、一つとなつていていた。足元から、頭  
のてっぺんまで、蒼い、深い、海が果てしなく広がっている。

背の低いコンクリートの境目を越えて、湿った砂浜を歩いていく。

差している傘は、その屋根が小さいこともあって、大して役目を果たしていない。風が不安定に、揺れ、渦巻いている。意味の無いことを分かっていても、フラフラと傘を立てて、足元を濡らしながら歩いていく、海へと。

時折叩かれるような風が吹いたり、または優しく撫でるようなそよ風になつたり。しばらくして、傘は元通り折りに畳んでしまった。雨は段々と弱まり、無数のミストになってきた。

濡れて足に張り付いたズボンの感触と、風に舞いその上に張り付いていく砂粒のくすぐつたさと、伸びては引いてを繰り返す波。

一人の男が、浜の先に、海原の彼方を見て立っていた。宮松は彼の側へと歩み寄つていく。

彼の目の前には、膝までの高さもない背の低い石碑が置かれていた。時折強く押し寄せる波に洗われながらも、流れずにじつと砂浜に座している。

彼は押し寄せる波を気にせず、しゃがみ込み、その石碑に人差し指の爪を立てた。そして、傷を付けるように引っかき、石に白い線を一本刻み付けた。爪が割れて、その傷が赤く染まる。指を離すと、そのまま手元の海水で洗つた。口に含んで舐めると、彼は立ち上がつた。

そして小さく、口づさむのだった。海の詩を。

あごひげを長く伸ばしたその風貌から、彼はずつと年上のように思えたが、富松よりも数歳だけ年上だという。彼は、詩人のこととよく知っていた、そして、ピアニストのことも知っていた。

彼は石碑のことを教えてくれた。詳しいことは分かつていないが、かの詩（あのテープに収録されていた）は、この浜で詠われたと伝えられている。そして石碑は、詩人の生地（或いは死地）を愛おしんで、後世の者が立てた物だという。この浜に来た者は皆、石碑の背に爪を立て、傷を刻み込んでいく。

富松は、彼に倣つた。

そこから、ピアニストのことが話題となつて、沢山語り合えたのは奇跡のようだつた。

ピアニストは、この浜で演奏するのをよく好み、何度も訪れているところ。咳き、吹き込まれた詩と、ピアニストの演奏とは密接な関係があるという。彼は、富松のテープを聴きながら、そう雄弁に語つた。詩の朗読を背景に、ピアノを弾いたこともあるという。

彼はピアニストのことを凄く詳しいことまで知っていた。彼の父親もまた熱心な、ピアニストの聴き手だという。父親に教えられ、小さい頃からピアニストの音楽の中で生きてきた。

富松は彼に、自分の連絡先を伝えた。彼はすぐに浜を発つてしまつた。欠かすことの出来ない用事があると、約束の时刻に遅れないようとにかく早々に切り上げてしまつた。

彼を見送るために道路まで出た。ちょうど道の反対車線に停まつていた車に彼は乗り、エンジンを掛けた。彼はパワーウィンドウを開いて、中では手を細かく振つていた。富松も振り返す、車はゆっくりと……歩くよりも遅く進み出す。やがて後ろから高速に迫つてくる丸っこい四駆車の存在が近づいてくると、スピードを一気に上げ、

疾走して行つた。

男は四五日の予定でこちらに来ていて、明日までは別の用事があつて忙しいが、明後日なら午後から時間が空くと言つていた。別れ際に、それでよかつたら、また浜で会おうと約束した。

元々富松は何泊でもしていける準備は整えていたし、そもそもここは家から遠く離れた見知らぬ海辺の町にいるのだ。簡単に会いに行つたり出来るわけでもない。直接話が聞けるならと、二つ返事で了承した。

ただ、後になつて、寝泊りする場所が無い事實を思い出す。しかし予定を変更する気持ちは全く無く、だつたら答えは一つとなつた。まだ季節が夏だというのが、唯一幸いなことだつたかもしれない。

時刻はまだ正午過ぎ、たっぷり余つた時間の潰し方を、彼が教えてくれた。切り取られたメモ帳の中には、住所と、線を引いただけのラフな道筋、四角く塗り潰された点から線が伸びていて、反対側の先には“資料館”と記されている。

資料館の館長を訪ねると、彼は帰り際にメモを残していった。彼の知り合いで、詩人のことを知るならまずここに行けど、示していつた。富松にとっては最初、特に興味惹かれたわけではなかつた。ピアニストのことが全てであつて、テープにたまたま収録されただけの詩人ことに興味があるわけではない。けど、男の不思議な言葉の力強さに促された。

ピアニストが詩人の影を追うように、自分もピアニストの影を追つてゐる。そして自分は、ピアニストの奥に隠れて潜んでゐる影の中の影を追つて、バスに乗り、走つていく。

一筋の、細くて、しなやかで、血で染め上げられた黒い糸、影の中で張り詰めている。

海外線に沿つて続いている、何も無い道路を辿つていいく。白がわづ

かにくすんだ明るい空は、小雨が降つたり止んだりを繰り返している。湿つて鈍く輝く道路の上を、靴底をずるずる滑らせながら、道にただ一人。動くものといえば自分と、左手に大きく広がる海原の波だけではないか。吹きつける風に震え、濡れた腕を手で擦る。本当に今日は夏らしくない。そういえば、リュックサックの中身は、もうとうに濡れてしまつて駄目かもしれない。けれど、もうそんなことは関係無い。

やがて右手に、グレーのタイル模様の三階建てアパートが現れた。そこだつた。三階建ての四角い建物で、上の二階と三階はアパートになつてゐる。事実、壁には『アパートの皆様へ』というタイトルが書かれた紙が貼り付けてあり、ごみの収集に関する注意事項が、（おそらく大家自らの）手書きで書かれていた、誰かが違反の捨て方をしたのだろう。

右手に、上階に上るための階段が見える。そしてアパート正面は、ガラスの観音開きの扉があり、ギャラリーの入り口となつてゐる。一階のスペースを全て、資料館として使つてゐるのだ。富松はその正面の入り口の扉に手を掛け、押し開き入る。誰もいない。

四方の壁には様々な絵が飾られていて、真ん中にはガラスケースの陳列台が二台並んで置かれている。受付には開かれたノートが一つ、無人。けど、明かりがつけられているので、扉も開いていることだし、閉館ではないはずだ。作品を一つ一つ、見ていった。……

扉が開く音がかすかに聞こえた。振り返ると、背の低い白髪の男が、静かな足取りで扉をくぐり、受付のところを回りこんで座つた。富松は、また身体の向きを戻し、また作品を見続けた。

飾られた絵の作品は、全てがタッチや画風が違つていた。しかし、全て共通して、海の絵が描かれていた。ある作品は、巨大な太陽が真つ赤に燃えていて、海が真つ白に焼けて、輝いている。ある作品は、墨で描かれたらしく、灰色の空と海は、その境界線をほとんど無くしている……まるで今日富松が見た“海”とそつくりだつた。

それらの絵が全てで三十点ほど、作品には、タイトルも作者の名前も、何の説明も書かれていなかつた。しかし、それらの絵たちには、様々な海があるが、それぞれ不思議な調和をしていて、どの絵も素晴らしいと富松は感じた。

そして、部屋の中央のガラスケース。黒っぽい紫の生地の上に陳列された紙はぼろく、書かれた文字もところどころ、塗り潰されたり風化で濁つている。しかし、それが今の富松には目に馴染んだ詩の断片であると、はつきりと分かつた。

受付の男がこっちに近寄つて、枯れた声で話しかけてきた。はたして彼はここに館長だつた。

先のひげづらの男のことを話すと、含点したように微かにうなずいた。館の管理者といつより、アパートの管理人であるといつことにこだわる彼は、元々経営していたアパートの一階をギャラリーに改装したという。

「好きな画家や作家を招待して、展示したりしている。今は、常設の絵と、詩の原本を飾つていて」  
男は年を重ねた者だけに出せる、包み込むような優しい笑みを浮かべて、入り口入つてすぐ右手端の絵を指した。

彼は詩人のことを、仔細に語りだした。

一九五十年代の生まれ、年と生まれの土地ともはつきりしたことは分かつていな。幼少時は一時期アメリカで過ごしていたらしいが、すぐに日本に来て、家族と生活していく。一生独身を貫き通し、両親とは死に別れるまでずっと一緒に過ごしてきたという。父親は日本人で、母親はアメリカ人だという。

当時の日本におけるハーフの珍しさというのがあり、周りとの軋轢を生み出していたが、相手に對してよりも彼は、自分自身に對して強いコンプレックスを抱いていたようだ。ただし、残された数枚の写真を見る限り、その面影は、受け継いだ父の血の濃さを感じさせる。

彼は十代の頃、睡眠薬を大量に服用した。無為に流れ過ぎていく時間、異質な自分という存在への抵抗、自身の体力や精神力の弱さ、知力の無さ、あらゆる弱さに、あらゆる生きていくことへの不安に。全てを、自分の力によって、断ち切ろうと試みた。けれど、再び時の流れと接続され、再び現世に舞い戻ってしまった。

誰が連れてきたのか知らないが、目覚めると病院のベッドにいた。ここへ連れてくる人間はいないはずだった。既に両親は他界していだし、彼はいつも一人だった。とにかく病院で適切な処置が施され、やがてある程度回復すると、無事に退院した。医師に聞かされた話では、現場には大量の薬がぶちまけられていたという。飲んだ量が思いのほか少なかつたので、回復も早く無事に助かったのだと言われた。そして、一度としないようにと注意を受ける。誰がいつたい病院に連れてきたのかと問うと、電話で、倒れているという通報がきたので、医師自ら駆けつけたのだという。

生還後も、別に代わり映えの無い日々が続くように思われた。けれ

ど詩人は、その後、ある小説家の作品を読み始める。その小説家も、睡眠薬で自殺をしていることを知り、本屋に出向いて全集を一冊ずつ買い、数ヶ月かけて読み尽くした。わずか二三十年前には生きていた男の残した言葉は、しかし、何の救いも見出すことは無かつた。けれど、それ以降、彼は文学に傾倒していくことになる。小説を読みながら、自身も作品を創り始める。幾つかの短編小説を書き上げた。これらの作品は後の時代……現代になって公式に発刊されたが、彼が生きていた当時は未発表のままに終わっている。というのは、彼は深い神経症にかかっていて、文壇連中ともろくに連絡を取ることがなかつたというのが“通説”になっている（彼の生前を知る人物は片手で数えれるほどしかいなかつたと言われる……有名な話で、彼の家には電話を置いてなく、連絡は誰であつても、全て手紙のみで済ませて、直接会うものはいなかつたという）。

彼は三十代の頃、引越しをして、地方へと移り住んだという。海の見えるところへ……そこは彼の生まれ故郷だという。そして、そこで死ぬまで、詩と小説を書き続けたと言われる。しかし、この頃に創られた諸作品は、一切残されていない。

一日後、ひげづらの男と、浜で再会した。空は相変わらず曇っていて、雨が降る様子は無い、明るい空だったので、浜に落ちている大きな平べつたい石の上に一人で座つた。そして、海を見つめながら、言葉を交わす。……

あの音楽は、本当に心を透き通らってくれる。大きな太陽の輝き、或いは清浄なる風、それともこの海の温かく美しい青だ。大海原の波に身を任せてたゆたう、全てが自由になつたような心地の良さがある。何度も、何度も涙を流して、そのたびに生きている実感……心地の良い実感を呼び起こしてくれる。幼い頃の純粋な心だ。このピアノの音に、出会えて本当に……嬉しい

もはや、この場には、再生するための機械や媒体はいらない。波の音が、風の音が、ピアノのメロディにあり、リズムであり、ハーモニーとなつた。

自然へと帰る。一個人間を、動物へと、解体し、組み直されていく。身体の原子一つ一つの活性を感じ取る。そして、涙……滲み出る。悲しいのか？ 辛いのか？ 本当の自分へと戻つていくはずなのに……どうして涙が出るのか。

歓喜！

喜びの！  
安息の！  
そつ、信する

海から帰り、中に入ると、奥の方で物音がする。台所へとそのまま進んだ。

彼女が部屋でクーラーを強く掛けながら、ちょうど昼食を食べていた。彼女は富松を見ると、そのまま目線を動かして、コンロの上のフライパンを見つめた。富松は重いリュックサックを扉の脇に下ろして、フライパンに近づき、上に蓋をするように掛けられている広告の紙を取る。有り合わせで作つたらしい、野菜炒めが少し残つていた。

一旦部屋に戻ると言い、リュックを引っ張つて、扉を出る。急にまたわりついてきたねつとりした熱気が、その時の富松にはちょうど、心地良かつた。自分の部屋……父の音楽の部屋、に戻る。中に鞄を放り込んで、洗面所へ向かう。

手を洗おうとして、蛇口の手前で一瞬驚いた。鏡に映つた自分の顔が、まるで別人のように見えたのだった。あごや鼻の下のヒゲがもしやもしゃと茂つている。富松は元々ヒゲが薄いほうで、ヒゲ剃りも数日に一度やればちょうどいいほど、ほとんど伸びなかつた。富松は、初めてピアニストの音を聴いた時から、ずっとヒゲ剃りをしていなかつた。変わり果てた黒い顔をしばらく見つめて、ふとそのまま伸ばしてみようと思った。部屋からハサミを持ってきて、不恰好に伸びてしまつているのを、適当に整え切つた。

そして蛇口を捻り、顔を洗い、歯を磨いた。そしてまた自分の部屋に戻つた。

机の引き出しを開けて、しまわれたカセットの中から七十七年のものを取る。テッキに掛け、長いヒスノイズを味わいながら、背もた

れの低い黒皮のソファに横たわる。目をつむる。そしてまた、海のかおりを、波の音を、風を、思い出し、まどろむ。鍵はかけてなかつたが、誰もこの空間を侵すものはいない。彼女は一度もこの部屋に入ったことは無い。別に禁止しているわけではなかつたが、この父の部屋に入るのを遠慮しているのかもしない。

ピアニストの搾り出すようなうめき声に、海辺であったあの男のことと思い出す。

身体を起こし、また引き出しを開け、テープを一掴みずつ取り出していいつて、全部机の上に置いた。二十数本のテープの山、全て、父が記録したのだろう、貴重な音たちだった。

男と、テープの交換をしようと約束した。富松に持つていて男が持つていなもの……反対に富松が持つていなくて男が持つているもの、幾つもあった。それらをピックアップした。今かけていたテープを停止させ、取り出して代わりにそれを入れる。そしてもう片側の入り口に空のテープを入れ（家に帰る途中電気店で買つておいた）、ダビングしていった。

一本。一本。三本。合間合間に台所から食料を取り出しに行き、部屋に持つてきて食べながら、次々に録音していった。十本ほど一気に作り上げた。夜になつて、部屋のカーテンは閉め切つていて、部屋の明かりの中にいたので、それほどの時間の経過に気付かなかつた。携帯電話を取り出し、メールを書き、男に送つた。近いうちに、また会いましょう。そのまま、部屋から出ずに、ソファで眠つた。

それから一ヶ月が何事も無く過ぎ去つていった。

大学の夏期休暇は終わつたが、もう出るべき授業は特に無かつた。ずっとピアノを聴き続けた。音楽に対する興味が湧き、クラシック、ジャズの名盤と呼ばれるものを片つ端から聴いていった。ピアノの響きを愛した。耽美で、凄烈で、そして孤独な音を。心の分身を、自分の影をその中に見た。美しくて、儂くて、情熱的で、寂しくて、悲しくて、誇り高い音楽を求めた。けど、あのピアニストほどに充足してくれるものは滅多に無かつた。そしてまた、ピアニストの元へと戻つていた。

節目はメールによつて付けられた、かの男から、ピアニストのコンサートのことを知らせてきたのだった。その時ほどの狂喜を、これまで生きてきたうちで感じたことは、思い起こそうとしても浮かんでこない。携帯電話の画面を見つめたまま、落ち着き無く部屋の端から端を往復した。どう返事を送ろうか、……この喜びの凄まじい程を、男に伝えたくて仕方が無かつた。

結局は簡潔で、極めて理性的な文章にまとめて送つた。それでも、數十分の熟考による綿密な言葉を書いた。返事は数時間後に届いた。

卒業論文はなんら問題も無く。

あの海での時から幾日も経ち、その間、オーディオの部屋で音楽を聴き続けて、そして一度ほどコンサートに参加して。そして学校を卒業した、その後。

家にいる時以外の時間が学校から会社へと替わつただけで、思ったほど生活にかわりばえは無かつた。日々と、日々の仕事をこなしていく。決まった時間に出社退社、あつという間に夜になつて帰る。そして部屋にこもりテープを再生させる。部屋にベッドを持ち込み、寝転がりながら聴き続ける。いつしか眠りに落ち、闇に漂い、やが

てピアノと勧哭によつて田を覚ます。出社する寸前まで、一分一秒でも流し続ける。そしてオーディオデッキの電源を落とすと同時に、今度はイヤホンをはめて、ポータブルのカセットプレーヤーを掛けた。ピアノの打鍵のリズムに合わせて、街を歩き、電車に揺られ、再び歩き、そしてビルが見えてきたら、口惜しいがスイッチを切る。イヤホンを鞄の奥にしつかり押し込んで、一応ネクタイの形を確認するために胸元に手をやつて、また仕事が始まる。

変化は、田に見えなことひで起きている。それは内側から染み出していく染みのよひに。

玄関を開けると、かつてとは違つ香水のにおいに気付いた。壁には、懐かしい学生の頃によく画集で見ていた絵画が、掛けられていた。

学生の頃、欲しくても買えなかつた、ある「デザイナー」の椅子やテーブルが、キッチンに置かれていた。

そしてなにより、妻の部屋をちょっととした出来心で覗いたら、部屋中に赤色の派手な服が何着も掛けられていた。それを見ていたところを、彼女は後ろから静かに近づいていて、富松に激しく噛み付いてきた。全て自分のお金でやつていて、何を文句付けることがあるのかと、激昂した。

ここは、誰の家なのだろうか。そして自分は一体、何なんだろうか。

唯一、家の奥の奥の、父のものだつた音楽の部屋だけは、唯一絶対の領域だつた。ここだけは、彼女には絶対に手を出させなかつた。そこにたどりつくまでの、長い廊下を早足で駆け抜けていく。もう他の部屋は、既に諦めてしまった。

## 21・招待状、白く輝く彼女

玄関のポストはまだ誰も手に触れていないくて、中身は配達されたままに残されていた。

一通、結婚式の案内状がその中に入っていた。

ハートマークの封筒を開き、そして中の案内状を見た。とても懐かしい名前が書かれていた。富松は記憶をさかのぼらせていく。

彼女……坂口はクラスの中でも目立って綺麗な女の子だった。記憶の中では、富松の彼女に対する印象は、長いウェーブの掛かった髪と、たまに見える可愛い耳やうなじだけだったりした。別に彼女のことをどうこうというわけではなく、自分より前の席にいれば自然と目に入るし、彼女はクラスの中では特に目立ったから、いつの間にかふと目がいっているのは自然だった。彼女は綺麗で、どちらかというと物静かな方だったけれど、周りには男の友達の方が多くて、いつも何人かの男子に囲まれて楽しそうに話をしていた。

段々とよみがえる記憶。彼女のイメージで「白」があるのは、きっと、彼女のすぐそばの窓から太陽の光がさんさんと差し込んでいて、それが机に反射して照らされていたからだと思つた。南向で、校舎の最上階で、眩しくらいに光が入っていても、あまりカーテンを閉めるようなことが無かつた。

でも新学期が始まつて一ヶ月くらいで、彼女は急に学校に来なくなつた。誰もそのことの理由を詳しく知らなかつたけれど、曖昧な噂は陰の中でよく広まつた。表面上の「結果」としては、彼女は退学したということだけだつた。

彼女が強姦されたと、表に……はつきり口に出して言つやは誰もいなかつた。

しかし、富松の記憶の中では、やはり光つていて彼女の姿しか思いつかない。

電車を一本乗り継いで、坂口の今住んでいるところ、隣の県まで足を運んだ。隣の県といつても、富松の住んでいるところから一時間も掛からずには到着した。

詳しい場所は、手紙の住所からインターネットの地図で調べて、場所をプリントアウトしておいた。大通りに面したマンションで、あつさりと見つかった。

富松は一度、前を通り過ぎた。行き過ぎる前に何とか足を止めて、道路と歩道との境の手すりに、もたれかかるように腰掛けて、マンションの上を仰ぎ見た。そしてまた目を下ろし、マンションの前を通り過ぎる人々の姿を眺めた。皆、誰も自分のことを知らん振りしているようだ、顔を伏せて歩き過ぎていく。

再会は、あまりに不意だった。

恐る恐るといった調子で、彼の名を呼びかける彼女の声が聞こえたからだ。

小さなお洒落なバッグを肘に下げた彼女は、今も変わらない白さだつた。髪の毛はあの頃より長くなり、さらに垢抜けた空気を、付けまつげを備えた細い瞳の辺りにふんわりと蓄えていた。

彼女は、さらに美しくなっていた。本当に、眩いほどに美しくなっていた。

結婚式から三ヶ月ほど経った。

梅雨が終わりを告げ、初夏の爽やかな太陽の熱さを感じ始めるあの季節に、彼女はワンピースと小さなハンドバッグだけを持って、大通りのバス停のベンチに座っていた。出勤のため、いつも利用するそのバス停の前で、彼女はとても思いつめた顔で、こちらを見ていた。彼女は立ち上がり、こちらに歩いてくる。バス停のひさしの下から出て、光の下に現れた彼女の顔は、美しく輝いた。ふと富松は、彼女はそのまま太陽の光の熱によつて溶けてしまうのではないかと思えた、彼女の顔にじつとりと汗が滲み、細い目の線や、小さな可愛らしい鼻、そして頬の痩せた様子から、夏の燃え盛る太陽の熱の元では、あまりに僥々と頼りなく思えた。

富松は、自分自身も、彼女の方へと歩を進めた。一気に彼女との距離は縮まり、やがて触れ合う寸前で止まつた。

真っ白く輝く彼女と、地表も強烈な照り返しで目も眩むほどに輝いている。白い光の中で、彼女の唇がわずかに開いたのを見た。そして富松は、彼女を抱きしめた。一瞬間を置いて、彼女の腕も富松の背を包んだ。

あまりに柔らかさの心地良さに、富松の男性は力を、熱を持ち始める。あえてその意思を伝えるように、富松は身体を彼女に密着させる。彼女の腰もすり寄せられる。

熱い、全身火をともしたように（あたかも太陽から飛び火したかのように）、焦げてしまいそうな感覚。体中の水分が蒸発していき、肌が布のようにかさつしていく。

彼女の肩をしつかり抱いたまま、数センチも離れないように気を付けてながら、彼女の身体を運んでいく。乱暴に、彼女の肉を引っ張つ

て、向かうべき場所へと彼女を導いていく。

彼女を全て食い尽くすために。己の欲求をもつ止めるとは出来ない。そして彼女も、全て肉体をこちらに献上した。捕食の原理に従うならば、全ての決定権を己が示さねばならない。

先に彼女を部屋へ押入れ、扉を閉め、振り向きかけた彼女の顔に、口付けをする。唇から、頬、鼻、瞳、頬、そして髪の中に。顔を離すと、彼女の胸元を驚掴んで、強引に下に引っ張つた。服を裂き、彼女の纏うあらゆるもの全て引き千切つた。そして、全てあらわになつた肉体にむしやぶりつく。かつて想像していたよりもずっと小さな乳房に、歯の型を付ける勢いで噛み付く。苦痛の声、そして今痛めたばかりの先を優しく舌で撫で、転がす。やがて彼女は可愛らしい猫の声を出す。

薄い蒼色のベッドの上で、一つの肢体を絡め合つ。美しい嬌声、時に夢心地の甘い声を、時に鋭い叫びを、即興的に奏でられる。男は女の身体の最深へと、どこまでも深く入り込もうと、自らの身体をひたすら突き進める。女もまた、相手の全てを自分のものにしたいと、男を愛しく包み、その肉を丸呑みにしようとする。穿ち、包み、痛みと悲しみはグチャグチャに碎け、その中からかわりに、全身を痺れさせる悦楽が新たに生まれ出る。もはや、それだけしか、他には何も求めてはいない。快樂だけを非能率に求める、脳の無いけだものへとなつてしまひたかつた。熱い血を飲みたくて仕方が無かつた、好い薰りを放つ真っ赤な血を。

部屋は蒼い、もう夜明けだつた。カーテン越しの氣だるい朝の光で染まつてゐる。

無音。

シーツの中で、指を立てて、叩く。

少しづつ蒼は明るさを持ち始めていく。

静寂を破るよし、走り去る車の音に怯える。

美しい音楽は終わってしまった。

何度も何度も、シーツの下で叩く。

終わるな、まだ終わるな。

途切れた旋律の続きを繋ごうと、指先を動かし続ける。

物音一つしないむなしいこの室で、一人、メロディを奏で続けようとする。

終わるな！

まだ終わるな！

まだ終わるな！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4763f/>

---

ballad(for piano)

2010年10月16日00時24分発行